



巻頭

身は寂(しずか) 語(ことば)も寂
心も寂にして 能(よく) 定(じょう)に入れる
すでに世の財利(たから)を すてたる比丘は
寂静者といわる (法句經 378)

◇新：法句經講義 5 ◇

<※「新・法句經講義」は、巻頭ページ掲載の法句經について解説しています。>

仏教が理想とするのは、「寂静」(じやくじょう)の境地といわれます。静かであること、何ごとにもとらわれのない境地、それこそが、お釈迦様が長い修行の末にたどりついた境地です。

解脱(げだつ)とか、今話題の出家(しゅっけ)というのも、「寂静」に達するための方法です。「とらわれ」から自分を開放する、ということは、「もの」からも「ひと」からも、「こと」からも、「おもい」からも開放することです。これは、なかなか簡単なことではありません。「出家する」、「自由になる」と言って、よりややこしい集団に入ってしまう例は、よくあることです。「とらわれない」ということに、「とらわれ」てしまう。「寂静」であることに「とらわれ」てしまう。難しいことですが、その限りにおいては、本当の自由も寂静もないのです。

「本当の自由」、「本当の寂静」を得ることは、簡単ではありませんが、心の目をひらいて、そこに近づくことはできます。仏様の教えに従って、毎日を修行と心得て、小さな努力も惜しまないこと。「理想の境地」に近づく方法は、案外近くにあることだと思います。

叙景 表紙写真を語る

表紙に使用している写真は、折々に撮影した風景や草花です。自分勝手な思い入れで表紙を飾ってきましたが、自分史のようなそんな思いを、しばらく記しておこうかと思えます。

今号は、春の発行ですから「桜」です。千葉県・房総半島の真ん中、三島湖の近くの谷をうめる桜です。静かで穏やかな房総の山なみのむこうに、シンとした春の空が広がっています。透き通った、始まりの春です。(友松浩志)

< 主管所感 >

君の名は? 友松 浩志

「君の名は。」をみて感動した。アニメ映画で感動したのは、「風の谷のナウシカ」以来のことだった。どこに感動したかと言うと、話しに感動した。映像は、少し写真っぽくて敬遠したが、話しが面白い。ふたりの主人公が時間を越えて入れ替わり、やがてお互いの名前が問題になる。同じ題名(「。」なし)の映画も、「数寄屋橋」で会うの合わないのといっって、最後は名前が問題になった。お互いを記憶すること、お互いを認識する手段としての名前。

私の名前は「浩志」という。「ひろし」と読むが、「こうじ」と読む有名な歌手がいるので、たまに「こうじ」と読まれる。お坊さん読みでは「こうし」である。「浩」一字で「ひろし」と読めるが、それに「志」がついたのは、戦争で二十歳で亡くなった叔父の名が「浩」だったから。戦争から帰ってこない「ひろし」を家の中に復活し、祖母の嘆きを少しでも和らげたい、という父の思いがこもっていた。つまり、代役である。

名前というのは、符丁である。だから、違う名前だってよかっただろう。でも、名前があるからその人と認識できる。名前がなかったら、その人をどう位置づけるか。

遠くに見える山の名前をあてるのを、山名(山座)同定という。富士山みたいに分かりやすい山もあるが、遠くの山をあてるのは案外難しい。でも、名前が分かると、親しみがわいてくる。植物も鳥も、名前を知れば親しみが増す。人の名前も同じで、名前を知れば親しくなるし、名前を呼ばれればうれしい。私は先天的に、人の名前を覚えるのが苦手ですすぐに忘れる。反対に、妻は人の名前を覚えるのが得意で、すぐに友だちを作ってしまう。うらやましいと思う。とはいえ、年を取って女性が一番はやく忘れるのが「夫の名前」で、夫が最後まで覚えているのが「妻の名前」だそうだから、我々の場合、「君の名は」は、一体どういうことになってしまうのか、未恐ろしいことである。(次ページに続く)

◆前住職17回忌法要◆

—友松諦道・前住職17回忌／友松美代・同内室33回忌—



△会堂で行われた法要

先代住職・友松諦道師の17回忌および同師内室・友松美代氏の33回忌の法要が1月28日に神田寺会堂で行われました。

法要は、浄土宗江東組西部のご住職方がお勤め下さり、神田寺総代、親戚等30名程が参加して下さいました。

先代・諦道住職は、神田寺初代の圓諦師とともに、神田寺の創立と、神田寺幼稚園の設立に尽力されました。幼児教育で幼稚園の全国組織をとめたり、保育者の養成など広く活躍されました。執筆された著作も多く、絵本なども残されています。

友松美代氏は、昭和23年に諦道師と結婚され、神田寺と神田寺幼稚園の運営に尽力されました。特に経理面に精通されていましたが、茶道や華道などもよくされて、神田寺の文化的な側面を支えられました。

仏教豆知識 71

往生

往生(おうじょう)とは、死ぬこと、亡くなることだと思われる方が多いかも知れません。

もともと往生には、生まれ変わる(輪廻転生:りんねてんしょう)という意味がありました。それが浄土思想の発展とともに、極楽に生まれること(極楽往生)が強調され、死と結びつきました。「往生ぎわが悪い」というのは、「死に方が悪い」という意味です。

一方で、「この仕事には往生した」と言うことがあります。これは、「自分の手にはおえない仕事だったので、阿弥陀様にお助け頂いた」という意味で、浄土教的には正しい使い方です。

◆元旦修正会に集う◆

今年も、元旦午後2時から像正会(しゅしょうえ)を行ないました。仏教聖歌と勤行式を参加者が声を合わせ、新年の平安と安寧を祈念しました。

主管のお話は「見仏聞法」。正しくものを見、聞くことの大切さを説かれました。議話のあと、記念撮影。恒例の甘酒で歓談。新年の抱負を記入する発願録(ほつが んろく)には、健康への願いを書く方が多かったようです。



△修正会参加の皆さん



巻頭

手に若(も)し 瘡(きず)なぐば
その手にて 毒を採(と)るべし
瘡なきものを 毒はそこなわず
かのごとく 自己(おのれ)にさわりなきものには
悪もついに起らず (法句経 124)

◇新：法句経講義 5 2 ◇

<※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。>

423 の偈(げ:詩句)から成る「法句経」のなかでも、人気トップ 10 に入るとされる有名な偈です。

傷のある手で不潔なものに触ると、傷から毒が入って病気になる。そんな経験が古代のインドでも知られていたのでしょう。現代でも、医療機関や食品製造でビニール手袋を使用するのは、衛生管理と同時に身を守るための常識です。

その手にもし傷がなかったら、毒に触れても身体に害はおよばないでしょう。それと同じように、自分のなかに問題点がなければ、いろいろな「悪」に触れても、その人のなかにそれが入りこむことはないのです。

どんな時代にも、世の中にはいろいろな人がいたり、いろいろなものがあってそれをすべてを避けることは出来ません。お釈迦さまの時代にも、こまった人がいたり、こまったこともあったでしょう。そうした人や事態に遭遇したとき、自分のなかにしっかりしたものがあれば、悪に染まらず、悪におちいることなく乗り越えられる。そうした確信を持つことが大切なのです。

そうした確信があれば、悪の巣窟にさえ堂々と入って行けるはずです。まわりの悪をなげく前に、まず自分を確立すること。それこそが求められているのです。

叙景 表紙写真を語る

写真は、信州の小さな山での一枚。山を下ると、空に大きな雲がわきあがってきました。もうすぐ夕立でしょうか。

夏の雲を見ると、「雲の峰」という季語を思い出します。中学の時、国語を教えて下さった掛貝芳男先生は、与謝野鉄幹門下の歌人でした。

「しばらくは 世のうるさを忘れんと 遠く眺むる雲の峰かな」 遠い夏の雲を眺めながら、静かにたたずむ先生の姿が目には浮かびます。

< 主管所感 >

食べるものを作るとのこと

友松 浩志

「食べる」というのは、人として生きる最も基本となる行為である。そのことを、男はあまり意識しない。ひもじい思いをしなければ、まあいい位のものである。一方で、家族の食事を毎日考えている女性は、想像以上にそれを意識しているように思う。

先日ある会合で、人気の料理研究家を招いて話しを聞いた。会場には、入りきれない位の女性が集結した。その人は、別に「うまい料理」の作り方を教えてくれる訳ではない。ただ、料理の基本の話をする。そして「一汁一菜」作ればいいというのである。

「一汁一菜」というと、お寺の食事を思い出す。研修で行った禅道場で出てきたのは、まさにご飯とお汁とお新香のみ。汁の中には、小さくて薄いワカメが何とか漂っていた。そのうえ、音をたててはいけない、最後まで食べきってお新香で茶碗を拭けと言う。

浄土宗の食事はもう少し良かった。京都の知恩院の食事は大分ひどいと聞いていたが、それでも毎食おかずがついた。そして質素な食事が続くと、あれが食べたいこれが食べたいというより、ご飯そのものが美味しくなってきたりした。

人は本当に飢えると、なんでも美味しくなるという。そんな経験が一度ある。若い頃、まだ血気盛んに山に登っていた頃、ある夏山で食べる物がなくなった。その朝、薄いお粥みたいなものだけ食べて沢を登って行くと、目の前を登っていく先輩の姿が何かボンヤリしてきた。沢の上部は深い藪で、私はそこで先輩の姿を見失った。道に迷い深い藪のなかで悪戦苦闘していた私に「おい、食べるものがあるぞ」と突然先輩が現れて、私にクラッカーの袋をくれた。どうやら、先に尾根の道に出た先輩は、通りがかった登山者にそれをもたらしたようだ。それこそ、二人はそれをむさぼり食った。それ以上にうまいものを、未だ食べていない。

食べることで私たちは生きている。だから、どんな食べ方をするかで私たちの生き方も決まっていく。毎日の食事づくりが人生を作っている。そのことに、世の多くの男たちはもっと気づかなければいけないだろう。こんな大切な仕事はないのだから。

◆花まつりをお祝いして◆

今年も、4月8日に花まつり「白象パレード」が行なわれました。今年も8日が土曜日となり、近年の秋葉原の状況から考えて早めの10時にスタートとしましたが、当日はあいにくの雨模様。雨の止み間にスタートしたパレードは、人も車も少ない大通りを、順調に進みました。

今年も、花御堂のお釈迦様に甘茶をかけたたり、おみやげに甘茶飴をいただいたり、賑やかに花まつりをお祝いすることが出来ました。特に今年も、古い卒業生が何人か参加して下さり、行事を長く続ける意味を感じました。

仏教豆知識 72

引導

引導(いんどう)とは、人々を仏教の教えに導き入れる「誘引開導」のことです。衆生(多くの人々)に教えを伝え、仏教徒にすることです。

一方で、「そろそろ彼に引導をわたす時だ」などと、最後通牒のように「引導」を使うことがあります。それは、葬儀のとき、亡くなった人に言葉(法語)を送る儀式から転用されたものです。禅宗で「引導」をわたす時、「カツ」と大きな声を使うことがあります。が、「引導」は葬儀において中心となる言葉で、「導師」が授けます。

◆平成29年度事業予定◆

■ 神田寺 ■

- ・現行の勤行式(お経の本)を一部改訂し、読みやすくします。
- ・現行の和文中心の勤行式とは別に、伝統的なお経も入れた版を作成します。
- ・彼岸案内などを刷新して、塔婆申込みなど分かりやすくします。

■ 葬儀・法事の申込みについて ■

● ご葬儀のご連絡

ご葬儀のご連絡は、葬儀の日程など決める前にお寺までご連絡ください。近県まで法務の執行を行ないます。最近、葬儀の略式化などが見られますが、簡素でもきちんと戒名をつけ、心をこめてお送りすることが大切です。費用等は、ご遠慮なくご相談下さい。

● ご法事のご連絡

ご法事のご予約は、半年位前からお受けしています。お電話でお申込み下さい。住職が不在の場合は、連絡先をご連絡下さい。折り返しご連絡致します。予約後、2週間位前までに、参加人数、塔婆希望などご連絡下さい。

■ 真理学園 ■

<神田寺幼稚園>

- ・主任を置き、指導体制を充実させます。
- ・コーナー保育を充実させ、多様なあそびの展開をはかります。
- ・行事(参観、遠足、餅つき等)の見直しを行ない、内容の充実をはかります。

<真理学園幼稚園>

- ・2歳児の保育を開始します。(もも組)
- ・水曜日の午前保育をやめ、通常の保育時間とします。
- ・冬休みの保育を開始します。(事前申込制)
- ・未就園児保育(ちゅーりっぷる一む)を隔週制にもどし、内容の充実をはかります。
- ・屋根の一部葺替、外壁、外遊具等の塗装更新を行ないます。



巻頭

たとえ 悪をなしたりとも

ふたたびこれを なすことなかれ

悪のなかに たのしみをもつなかれ

悪つもりなば 堪えがたき

くるしみとならん

(法句經 117)

◇新：法句經講義 5 3 ◇

<※「新・法句經講義」は、巻頭ページ掲載の法句經について解説しています。>

「悪」というと、「そんなものとは無縁です」といった戯をする人がたくさんいます。本当にそうでしょうか。

引退した横綱のように、人を殴った人は少ないかも知れませんが、万引きなんかほとんどの人はしていないはずですが、でも、かげで人の悪口を言ったことのない人はいますか？ 噂話にウキウキしたことはありませんか？

大きな声で子どもを叱ったこと、わがままを言って親をこまらせたこと。思い返せば、人は人に迷惑をかけ、しなくてもいいことをし、すべきことしないで、人生を送っていくのです。

人は弱い存在です。「正しいこと」だけで生きてきたわけではない。悪いこともしてきた。そのことに気づいたなら、それを繰り返してはいけません。それを、「やっていいこと」にしてはいけません。

自分の弱さ、いたらなさを自覚した人は、前に向かって生きる人です。正しさに向かって生きることが出来る人です。悪を悪として自覚すること。それこそが、正しく生きる入口なのです。

叙景 表紙を語る

雑木林には、春夏秋冬それぞれに楽しみがあり、それぞれの美しさがあります。

新緑もよし、雪の日もよし。でも、枯葉の季節、サクサクと落ち葉を潜んで歩くのも、何か切なく味わいがあるものです。

東京の多摩地区に幼稚園をつくって27年。武蔵野の面影を残す、たくさん雑木林を見てきました。冬枯れの、よく手の入った雑木林は、日あたりも良く、木々の美しさが映えます。遠い記憶をたどりながら、ザクザク枯葉を踏み、独り多摩の雑木林を歩いた、そんな日の一枚です。

< 主観所感 >

今日を生きる

友松浩志

還暦を過ぎた頃から、同窓会とか、同期会の誘いが多く入るようになった。みんな暇になったのか、参加者もそこそこいて盛会である。といて名札でも付けていないと、一体どこの誰やら様変わりはお互い相当のものだ。

直ぐに打ち解けて、昔あったこと、現在の心境など、和気あいあいと盛り上がる連中もいるが、黙ってひたすら飲食にはげむ人もいる。人生いろいろな生き方をして、今ここにいる。昔のように振る舞えるかと言えば、みんなが皆そうも行かない。居心地のいい人も

いれば、そうでない人もいる。

音楽プロデューサーの松任谷正隆氏が、ある雑誌にこんなエッセイを書いておられた。「同窓会は、昔から敬遠してきた。何十年も会っていなかった奴に、急に<お前>呼ばわりされ、その上、お前は稼ぎのいい奥さんに恵まれていいなあ」なんて言われる筋合いはまったくない。」(言うまでもなく、奥様はあのユーミンである。)まったく同感だが、その同窓会の幹事は、おそらく氏の参加を心待ちにしていたはずだ。

人は、様々な思い出を持って生きている。いい思い出もあれば、二度と思い出したくない思い出もある。でも、そうした思い出がその人を作っている。年をとると、昔の思い出がよみがえる。人によっては、昔の自慢話ばかりするようになる。「俺が部長だった頃」「私が若かったころ」そんな話は、家族にとってはどうでもいいことだ。「悲しきかな我人生」である。同窓会は、そんな昔話の「吐き出し口」なのかも知れない。

とはいえ人は、「思い出」だけで生きられるわけではない。思い出なんか振り返らず、思い出なんか捨てて生きる、それもひとつの生き方。「前を向いて生きる」なんてかっこいい。でも、そんな「かっこいい」生き方が出来ない人は、ひたすら「今日を、今日も」生きなければならない。ひたすら黙って、「今日」を生きる。

圓諦老師が、晩年好んで色紙に書かれた言葉「今日生きるよるこび」。「今日」を正面から受けとめ、今日を喜んで生きる。それも、いい生き方である。

中道(ちゅうどう)というと、最近は馴染みのない言葉になりました。以前は、左翼でも右翼でもない政治姿勢を、中道路線、中道政治などと言ったものです。極端に片寄らない姿勢が、中道政治の目標だったようです。この「中道」という言葉は、まさに仏教語です。仏教の中心になる重要な言葉です。

お釈迦様は、はじめ様々な苦行をされました。でも、覚りを得られなかった。そして、菩提樹の下で瞑想され、苦行主義でもなく快樂主義でもない道「中道」こそ、目指すべき道だと、覚られたと言われます。仏教はその土台の上に築かれた宗教です。

極端な考えに片寄らず、中の視点でものを考えることに徹底したのが、竜樹(りゅうじゆ)が創設した「中観派」(ちゅうがはん)という学派で、「空」の思想を深めていきました。

◆ 遊行会・ともに歩む日 ◆

— 川越／蔵造りの街並みと喜多院 —

今年の遊行会(ゆぎょうえ)は11月21日、埼玉県の川越を歩きました。明治初期の町並みを残す「蔵造りの町並み」、かつての江戸城の一部が移設されている「喜多院」。見どころの多い川越の街を、秋の一日ゆっくりと楽しみました。

神田寺に集合した一行は、小型バスにゆられて川越へ。渋滞もなく、先ず市立美術館に到着しました。川越出身の洋画家・相原求一郎の作品や、開催中の銅版画家・小林忠良展を鑑賞。博物館では、川越の歴史を学びました。その後いよいよ蔵造りの町並みへ。少し自由散策の後、「時の鐘」前の「とりせい」で釜飯を食べしばし休憩。特製の「つくね」は絶品でした。

最後に訪れた「喜多院」は、秋の装いも美しくかつて江戸城にあった建物の豪華さに驚かされました。建物を出ると、秋の夕陽が五百羅漢の様々な表情を、鮮明に浮かび上がらせていました。

■ 遊行会・しばらく休会のお知らせ ■

平成16年(2004)に再開した遊行会。毎年ではありませんでした。檀信徒の皆さまと都内や近郊を訪れ、秋の一日を楽しんでまいりました。もっと続けたい気持ちもあるのですが、この辺で一度お休みにして、新たな企画を考えることにしました。毎回参加された方もおられます。皆さまのご支援、ご協力に対し、厚く厚く御礼申し上げます。

■ これまでの遊行会 ■

- ・平成16年 上野／谷中周辺
- ・平成18年 深川／清澄庭園等
- ・平成19年 品川／法禅寺訪問
- ・平成20年 皇居周辺
- ・平成22年 芝／増上寺参拝
- ・平成24年 青梅／天寧寺等
- ・平成25年 鎌倉／田谷の洞窟等
- ・平成26年 小石川／永青文庫訪問
- ・平成28年 柴又／帝釈天参拝
- ・平成29年 川越／喜多院参拝



△川越市立博物館で記念撮影